

これからの世界を作る仲間たちへ

落合 陽一（1987年生まれ） 小学館

著者は2015年に米国 THE WTN が世界最先端の研究者を選ぶ「ワールド・テクノロジー・アワード」ITハードウェア部門に於いて日本から唯一人最も優秀な研究者として選ばれた「現代の魔法使い」と異名を取る、その種明かしは本紙を読んでお楽しみください、以下本紙のガイダンスとしてお読みいただければ幸いです。

{ ディープラーニング }

人間の脳の神経回路(ニューロン)を模したプログラムを作りコンピュータが自ら学習する事、コンピュータに大量の画像を呼び込ませることで、コンピュータが猫の概念を(判定基準)自ら学習することに成功したと。

人口頭脳が人間を超える瞬間のことを未来学者のレイ・カーツワイルは「シンギュラリティ(技術的特異点)」と名付けたが、それより先は人口頭脳が猛烈なスピードでテクノロジーを進化させていくので人間の世界の将来を予測する事すらできない~との説は人類の未来を不安なものと感じるが、一方ではコンピュータの進化はシンギュラリティの様な単純な変化ではなく「マルチラリティ」をもたらすと語る研究者もいる。

それは「人と機械の織り成す社会の中で順次コンピュータと人の組み合わせが問題を解決して行くのではないか」との説も紹介されている。

{ 映像の時代を生きた親は子供に見当違いの教育を与える? }

現在の小・中学生が社会に出るころには社会の仕組み、死生観、幸・不幸観、結婚の仕組み等は劇的に変わっていくので多くの親が見当違いの期待で教育を与える恐れがある。

{ 人間がやるべきことは何か }

コンピュータには不得意で人々がやるべきことは何かを模索することが必要「意識だけが低い系にならない事」その特徴は専門性や独自性がなく、自慢するものが人脈か評価されない活動歴、意味のない頑張りであると。

コンピュータに無くて、人間にあるのは「モチベーション」でコンピュータには「これがやりたい」と云う動機がないので「モチベーション」をしっかりと持ち、実践する手法があれば使う側にいられる。

親の世代は「子供が良い大学に入ると良い企業に就職できて幸せな人生を送れる」という価値観はコンピュータで吹き飛ばされる。

{ 力づくで何とかするのは全てコンピュータにやられる }

10年ぐらい前まではロゴとウェブサイトを200万円で丸ごと請け負うケースは普通であったがインド当たりの物価の安い国では2千円でも可能で結果として人はインターネット上に並んだ商品に成り下がってしまっている。

{ SIRI は使える秘書 }

2011年に登場して4年分のデータを蓄積しただけでその能力は格段に成長していて話しかけるだけで回答が得られるので「使える秘書」として成長が期待されている。

{ ウーバー(UBER)米国の配車サービス }

専門アプリで現在地や目的地を入力すると予め登録しているタクシー会社やドライバー(白タクは日本では認められていない)の中から最適のものを選んでくれるし、料金はアプリで清算、ドライバーの平均給料はなんと日本のタクシー運転手の3倍程度、こうしたサービスは利用者の利便性を高めるだけでなく、タクシー会社の在り方を大きく変え無駄な流しも少なくなるので省エネルギーにも。

{ コンピュータは資本主義をどう変えたか }

IT企業が一大勢力として台頭、物理的な資源はほとんどなく必要な資本は人で、しかも「暗黙知」や専門知識にリソースとしての価値があり、それをどう取り込めるかIT世界での勝負どころ、今後は益々人に対する評価は厳しくなり日本式の教育の在り方は根本的に改めない限り、益々世界の最先端から大きく取り残されてしまう可能性大。

{ 5つの問いを自らに問いかける }

自分が「何を研究すべきか」「何の専門家として生きていくのか」を分かっている人はそれだけで有利なポジションに立てる、その為には「その新しい価値が今の世界にある価値を変えていく理由に文脈がつくか」～文脈とはオリジナリティの説明の事～そして「それに対してどれ位、造詣が深いか」が大切。

1. それによって誰が幸せになるか
2. なぜ今、その問題なのか、なぜ先人達はそれが出来なかったのか
3. 過去の何を受け継いで、そのアイデアに到達したのか
4. 何処に行けばそれができるか
5. 実現の為のスキルは他の人が到達しにくいものか

以上の5つにまともに答えられれば、そのテーマに価値があると、そして他人にも共有が可能な価値になる可能性がある。

{ 日本人の1億人ではなく世界の70億人を相手にしよう }

世界の境界線を破壊したコンピュータ、どんなニッチな問題でも大きな価値を生むことが出来る例として、激しい内戦の続くスーダンで両腕を失った少年の為に3Dプリンターを使って義手を作るプロジェクトを立ち上げプラスチック製の義手を僅か100ドルで作れるようになった、事業の採算は義手の販売ではなく企業の宣伝などに使うことで上げている、小さな問題を解決することで新たな事業を生む、先ずは問題を発見することが、大事。

{ 語学力に捕らわれない時代がやってくる }

どんなに語学力が流暢でも解釈が低レベルで説明が下手だと話は聞いてもらえない、重要なのは語学力ではなくて、相手が「こいつの話は聞く価値がある」と思えるだけの知性を磨くことだ、話を聞く前に語学力だけで相手の知性を値踏みするのは日本人癖
ソフトバンク孫正義は高校生の時にアメリカにわたり大学受験で日本語さえ分かれば回答できるから辞書を使わしてくれと云って認められ合格した、いかにも孫正義氏らしいエピソードであり、面目躍如たるものが感じられる。

{ 富は世界中で溢れ若い有望な人に投資したがつている }

これからの時代に時間を自由に使う生き方を選ぶ人が増えるし、労働時間が自由な人々が仕事を得やすい社会となる、いや既になっている、資本主義はお金を生むシステムでお金持ちは富を貯めておくだけでは意味がなく投資して再分配したがつている。
企業には大きなリスクがあり成功するのはせいぜい 1% 位なもの、何時からでもスタートラインに立て自由に時間を使って思い通りに自由な時間を使って戦えること自体が幸せである。

{ あなたの「市場価値」が最大化するのはいつか }

これからの時代は年収1千万円の会社に入り安心する事ではなく「年収1千万円以上の価値のある人間になる事」

ツイッターという会社は膨大な数のユーザーがいるものの広告以外で何故サービスを提供出来るのか、今はそんなに儲かっていないが将来的に大きな利潤を生み出す期待が持て企業価値は高い。

終身雇用の崩壊とともに年功序列の社会ではなくなり人材の市場価値はアップダウンを繰り返すのが当たり前と、転身を繰り返す度に上昇と下降を繰り返し乍ら「次にできる山」を高くて行けば人生の最高到達点をどんどん高く設定できる。

重要なのは「言語化できる能力」「論理力」「思考体力」「世界70億人を相手にすること」「経済感覚」「世界は人間が回しているという意識」

そして何より「専門性」は重要、これらを武器として身に着ければ「自分」という個人に価値が生まれ活躍の場が見つかる。

{ テラヘルツ電波 }

研究者として著者が次に大きな興味を持っている「テラヘルツ」は電波の周波数の単位で、AMラジオ等のキロヘルツの千倍がメガヘルツ(テレビ放送等)その千倍がギガヘルツ(無線LAN等)そのまた千倍の周波数を持つのがテラヘルツ帯の電波、精度の高いものを実現しようとするとな数億円かかるので実用化できるまであと10年かかる。

この電波を使ってホログラフィの制御や応用、又面白いのは「スキャニング」で実用化されると、やがて世界は大きく変わる。

例えば駅の改札口が不要でコンピュータを使えば何千人・何万人を一瞬でスキャニングして「検札」も可能に、又テラヘルツ電波の機能が向上するとカードやチップを持ち歩かなくても既存の画像認識技術と組み合わせることで一人ひとりの人間そのものをスキャニング出来るようになり人類はあらゆる検札行為から自由になる可能性がある。10年前に「スマホで改札を通して、コンビニで買い物、海外の人と電話代も掛からないでテレビが通話できる」ことが信じられなかったように現実の世界となる。

他にも著者が関心のある事は「継ぎ目のない建物を作る」とか「ディスプレイを二次元から三次元に開放したい等」いずれも人間の既成概念を覆す発想で、既成概念を打破するには「素人」と「玄人」の両面が求められる、素人の心を失わないままで玄人になる、それを考えながらキャリアを進めていく必要がある。

{ WOW！～何だか「ジーンとした」という感動 }

オキュラスリフトというバーチャル・リアリティ(VR)＝ヘッドセットは従来の視野角が25～45度程度に対して110度もの視野角を持ち没入感がある3D映像を楽しめる、これを考えたのはパーマー・ラッキーという当時21歳の若者で彼には高い専門性を持つ優秀なチームがあり、色んなアイデアの積み重ねからドンドンチームの輪が広がり最終的に彼らのベンチャー企業は2千億円でフェイスブックが買収した。

これからの時代は一人の天才で世界は変えられない、何人もの「変態」がお互いの専門性を掛け合わせることで世界規模の WOW！を生み出す時代。

自分にとって気になる「小さな解決したい問題」を見定めて、その周辺を深く深く、掘り下げていくこと、沢山の人の視座で問題を見つけていくことが大事。

{ 社会に自分の価値を認めさせること }

自分の価値を認める強い「信念」こそホワイトカラーが絶滅する世界を生きていく上で大切、人は年を取れば取る程「何のために生きるのか」を考えなくなり、目の前の幸福や不幸に右往左往しながら暮らしていくが信念を持っている人は

「今できる人類の最高到達地点に足跡を残す」と云うこと、それが生きる意味であり価値だと著者は考えている。

勿論そのレース「種目」は無数にあり世界70億人を相手にすればどんなにニッチな問題でも大きな価値を生むことが出来ると、そしてそこでは世界の境界線を破壊したコンピュータが私たちの武器となる。

{ 著者からのメッセージ }

これから自分の道を模索する若い人たちは確固たる専門性とオリジナリティを持たない限り、この世界で「自分という人間の価値」を自己肯定はできない。

世界に変化を生み出すような執念を持った人に共通する性質は「独善的な利他性」だ、たとえ勘違いでも自分が正しいと信じていることを疑わず、それが他人の為になると信じてあらゆる努力を楽しんで行うことが出来る人、その為には、先ず猿真似でもいいから始めること、沢山の知識を貪欲に吸収してオリジナリティを追求していくこと、それがこれから先、いつの時代でも幸せな生き方だと。

何を今日から始めるか、この本の若い読者の人たちが未来を作ってくれることを願っています。

以上